振興部の

知っとこ！神美

知っておいてほしい神美を紹介します。

勤王の志士
【田中河内介】

田中河内介は、文化十二年（1815）、出石郡香住村（豊岡市香住）の医師・小森正造の次男として生まれ、賢二郎といった。
出石藩儒・井上静軒に学び、天保六年（1835）二十一歳のとき上京、摩島松南の門に入り、のちに山本亡羊に師事した。
同十二年、二十七歳のとき、京都蛸薬師油小路に私塾を開いた。
公卿の中山大納言忠(ただ)能(やす)の子女の教育者として山本亡羊が賢二郎を推薦し、同十四年、中山家に召し抱えられた。
忠能は賢二郎を宮中に参内するときに随行させる諸大夫(しょだいぶ)に任命したかったが、諸大夫は世襲であるため、中山家諸大夫の田中近江介の長女の婿養子として家督を継がせたうえで、諸大夫の職を譲らせた。
同十五年、三十歳のとき、中山家諸大夫・田中河内介が誕生した。
河内介は、忠能を補佐し、次女・慶子を教育した。やがて慶子が宮中に上がって孝明天皇に仕え、嘉永五年（1852）九月、祐宮(さちのみや)（のちの明治天皇）を生んだ。
祐宮は中山家で養育され、河内介は御用掛として側近で奉仕した。
同六年のペリー艦隊来航以来、尊王攘夷の風が吹きすさぶなかで、河内介は倒幕・攘夷・王政復古の実現に専念するため、安政四年（1857）八月、中山家を去った。
文久二年（1862）、大坂に来た島津久光に上書して攘夷倒幕を訴えたが、過激を嫌った久光によって鎮撫された。いわゆる伏見の寺田屋騒動である。
大坂の天保山沖から息子の左馬介とともに薩摩へ送られる途中、垂水沖で殺され海中に投じられた。遺骸は翌朝、小豆島福田港に漂着し、浜に葬られた。河内介四十八歳。左馬介は十歳であった。
（左馬介は奇跡的に救出され姫路の旧家で養育されたという説がある。）
左馬介＝瑳磨介　（　　）は異説

（中貝正巳）　但馬の歴史「田中河内介」から

但馬・神美の方言　わかるかな？

おーがっそー

意味　：（髪の毛が伸びて）ぼさぼさの状態。
例　：頭が<u>おーがっそー</u>になったで散髪に行けーや。
（髪の毛が伸びているから散髪に行きなさい）